

## 研修報告書 No.19

所 属： 昭和大学病院

氏 名： 増永 裕輔

研修先： 渭南病院

私は高知県土佐清水市の渭南病院で研修を行った。研修内容は、午前は外来、救急外来対応、午後は往診、訪問診療、産業医の衛生委員会への参加といった内容であった。

外来、救急外来で入院となった患者さんは最後まで自分で治療方針等を考え管理することができた。最初から最後まで自分で方針を考え患者さんを診る経験は大学病院ではなかなかできないため非常に有意義であった。また、方針を考える上で迷った際には上級医の先生方が相談に乗ってくださり、安心感もある中で研修を行うことができた。午後の往診、訪問診療、産業医の衛生委員会への参加は今まで教科書上の知識としては知っていたが、実際に医師として携わるのは初めての経験であった。

外来、救急外来では基本的には1, 2次救急相当の患者さんが来院する。都心の大病院では他科のスタッフが充実しており、自分の専門外であればコンサルトをかければ診てもらえるという安心感があるが、地域医療においては他科のスタッフが充実しているわけではないため、自分の判断で治療や転院等を考えるためより幅広い知識や技術が求められると感じた。来院される方の中には3次救急相当の患者さんも混在する。研修病院から2次医療圏の拠点病院までは車で40分ほど、3次救急受け入れ病院となると高知市内まで行かなければいけないためドクターヘリを使用する。実際に大動脈解離 Stanford A型で緊急手術が必要となりドクターヘリでの搬送が必要となった症例を研修中に経験した。危険度の高い緊急疾患を診断できる能力、さらにはその疾患に対して初期対応ができることは医師として必ず身につけなければいけないと実感した。同時に地域の消防隊や院内の医療スタッフ、病院間の連携の重要性も実感することができた。今回の症例では救急要請が消防隊に入り、到着した時点で大動脈解離の可能性を疑い渭南病院に連絡し、そこでの情報交換からドクターヘリ要請に至った。そのため病院到着後大動脈解離と診断がついた時点でスムーズにドクターヘリまでの搬送を行うことができた。

往診、訪問診療では高知県西部の医療の現状を身をもって知ることができた。都心部では近年往診や訪問診療の企業が増えてきている。高齢化に伴い往診や訪問診療といった医療に対する需要の高まりによる動きと考えられるが、それ以外にコストパフォーマンスの良さもこの動きの一因と考える。都心部であれば1件1件の移動が近距離であること、集合住宅も数多く存在するため1件の移動で複数人の患者さんを診療することができる。一方で高知県西部のような中山間では集落が点々としており集落間の移動にかなりの時間を要し、集落の人口も少ないため一度の移動で少数の患者さんしか診療することができず、企業と

しての利益を上げることは難しいと容易に想像がつく。利益を出すには1日120件回らなければ採算が取れないと言われているこの事業で、中山間での事業提供は企業としては厳しいものがある。そのため住民のほとんどが高齢者であり都心部以上に往診、訪問診療が必要とされる地域であるにもかかわらず提供が進んでいないと考える。

入院する患者さんを自宅に帰すために、疾患の治療の他に家族背景や自宅周辺環境の把握が重要であることも今回の研修で学ばせていただいた。具体的には患者さんが帰宅後に一人で食事が取れたり、入浴ができるのか、家族による介助が可能なのか等を把握し、不可能なら介護保険を利用し訪問看護をつけるなどの手段も考慮し退院調整を行うことである。研修病院では退院前に理学療法士、ケアマネジャーで患者さんの家に行き住宅評価をし、家族も一緒にケアプランを考えていく、医療と福祉が連携をとることで地域全体で患者さんを診ていくことが高齢化した、特に独居の多い地域医療では必須になってくると感じた。

今回の研修では診療面では今まで勉強してきた内容を実践できる場を与えていただいて大きく成長できたと実感している。社会調整面では私の普段の生活圏とは大きく異なっており地域特有の難しさを経験した。これまでは”疾患を治す”までしか考えられていなかったが“治療後の生活”にまで考えを及ぼすことができるようになった。仕事面、プライベート全てにおいて非常に充実した研修であった。